

平成28年度

学校評価総括表

奈良県立青翔中学校
奈良県立青翔高等学校

(別紙1)

平成28年度

学校評価総括表

奈良県立青翔中学校・青翔高等学校

学校運営計画 (4月)		総合評価	
教育目標	<p>本校の教育は、法に定められた根本精神と、本県学校教育の指導方針に基づき、豊かな人間性や社会性を培うとともに、科学的な思考力と創造性を身につけ、科学技術の発展と進歩に寄与する心身ともに健全な人間の育成を目指す。</p> <p>(1) 豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。 (2) 科学的な思考力を培い、自ら学び、自ら考える力を育てる。 (3) 個性の伸長に努め、意欲的な進路実現を目指す。 (4) 日々の生活の中から共生の精神を養い、幅広い社会性を育てる。 (5) 生涯にわたって、自らの健康と安全を維持できる実践力を育てる。</p>	B	
運営方針	<p>全教職員の持てる力を結集し、明るく元気でさわやかな学校づくりを目指す。そして、あらゆる機会(Chance)を生かし、自分を変革し高め(Change)、粘り強く挑戦する(Challenge)生徒の育成を目指す。</p> <p>また、開校三年目の青翔中学校のスムーズな運営と特色ある学校づくりに向け、教育委員会とも連携して取り組む。</p>		
平成27年度の成果と課題	<p>本年度重点目標</p> <p>具体的目標</p>		
<p>全国初の理数科単科高校として開校して12年が経過、この間、理数科の特色ある様々な教育活動の取り組みと成果が評価され、文部科学省から2期目のスーパーサイエンスハイスクールの指定を受けた。また、タイ国の王立サイエンスハイスクールの姉妹校との共同研究および国際学会での発表など国際的な理数教育を中心に交流を進めてきた。</p> <p>SSH指定研究を軸として、学校設定科目「探究科学」の成果を各学会において発表し、各種コンテストにも積極的に参加するとともに、実績を着実に積み上げつつある。</p> <p>生徒には、これらの力を育成し、併せて規範意識の高揚、生徒会活動、課外活動、部活動など生徒の活動の活性化に向けて引き続き推進していく。生徒の努力もあり、本年度の進学について国公立16名の合格者を出すことができた。</p> <p>SSH二期目を迎え、さらに実績・成果を目に見える形にしなければならず、さらに成果を発展的に積み上げる努力が求められるとともに、教科間の連携、教科横断的な取組、地域との連携等に力をそそぎ、奈良県中南部の進学拠点校としての役割を果たす必要がある。</p> <p>また、奈良県初の併設型中学校の学校経営を軌道に乗せ、魅力と特色のある中学校となるよう取り組みなければならない。</p>	<p>開校三年目を迎えた青翔中学校の存在価値と評価を確立するための将来を展望した魅力と特色ある学校運営をめざす。</p>		<p>県教育委員会指導の下、青翔中学校の施設・設備、教育課程、その他教育環境等を学年進行とともに整えていく。6年間を見通した中高一貫教育の内容を明確にし、月1回の保護者会、週1回の学級通信の発刊などの他、小学生及びその保護者等への積極的な広報も展開する。</p>
	<p>教職員は、教育専門職としての自覚のもとに、常に研鑽に努め、指導力の向上を図るとともに、各々のもつ特性を生かして、中高一貫教育を展望した特色ある学校づくりに努める。</p>		<p>研修に対する意識の高揚を図り、公開研究授業を実施し、情報の共有化と共通理解を推進する。青翔中学校と青翔高等学校を一体としたリーフレットの作成、学校だよりの発行、Web Siteの充実等による積極的な広報を展開する。また、教員の学会発表など外部での発表も推奨していく。</p>
	<p>自ら探究する力や伝える力を身につけさせ、生徒が夢を実現できる学校づくりに努める。</p> <p>SSHの取組の一環として、タイのサイエンスハイスクールとの交流を進展させる。</p> <p>地域との連携を一層充実させ「地域の学校」を目指す。</p> <p>併設中学校において、SSHの取組を段階的に取り入れ、生徒が興味関心を抱くようにする。</p>		<p>探究活動の充実に努め、各種学会発表・コンテストにも積極的に参加する(延120人)。また、本校独自の理数科教育システムを活用し、国公立大学及び難関私立大学理系学部への進学者30名以上を目指し学校をあげて組織的に進路指導に取り組む。</p> <p>タイのサイエンスハイスクールと共同研究を実施し、生徒・教員の交流に積極的に取り組み、タイで行われる「発表会」に派遣する。</p> <p>また、国際学会にも参加する。</p> <p>併設中学校でのSSH事業の関わり、展開の仕方について検討・実施する。</p>
	<p>生徒の自主性を育て、互いに認め合い高めあう集団づくりに努める。豊かな知性と感性をもった思いやりのある人間性を育てる。</p> <p>人権を尊重し合える集団の確立と、自他を敬愛する心や公共心・道徳心、規範意識および国や地域社会を愛する心の高揚に努める。</p>		<p>生徒一人一人の人権感覚・人権意識を高め、人間としての生き方やあり方を考えさせ、明るく温かい人間関係を醸成する。</p> <p>HR活動を充実させるとともに、学校生活のあらゆる場面で、基本的生活習慣の確立ときめ細かな生活指導を行う。</p> <p>全教育活動に道徳教育の観点を入れ、規範意識および国や地域社会を愛するための地域活動、ボランティア活動等に積極的に参加する。</p>
	<p>教科指導力を高め、ねらいを明確にした授業及び指導法の研究・実践に努め、生徒の基礎学力の定着と応用力の向上を図る。さらに、教科指導を通じ、科学的な思考力の育成に努める。</p>		<p>自宅学習の定着を目指し、基礎学力とともに高度な学力を計画的に育成する。土曜・長期休業中の学力向上講座、ステップアップ講座、学力補充講座、勉強合宿等を実施する。SAWに積極的に参加することで科学的な思考力の育成に努める。また、教材研究、指導法や評価について指導主事の招聘や教育研究所の講座を活用し積極的に研修に努める。</p>
	<p>日常の教育活動を点検し、学校・家庭・地域の連携をさらに深める。生徒の実態を的確に把握して、個に応じた適切な指導・支援に努め、健全な発達を促す。</p>		<p>生徒が抱える問題の早期発見、早期解決に努める。生徒理解に努め潜在能力を発見し引き出し、実体験をとおして「努力」が「よろこび」や「やりがい」につながる成就感や達成感を体得させ、探究心や向上心をもたせる。</p>
	<p>学校経営・運営上のあらゆる場面から課題を見直し、その対策に取り組む。</p>	<p>部活動の活動状況や部員数等から、見直しを。</p> <p>進路指導・教科指導法等ダブルスタンダードに対応できる、教員の意識改変と「力」の育成に努める。</p>	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策	
教 務	中高一貫教育校としての特色ある指導法、教育課程等を検討する。	中学校が全学年そろうことにより、高校への学習の移行がスムーズにできるような授業の実践に努める。	A	B	中高すべての学年の生徒がそろうことにより、6年間を見通した授業形態、学校行事、教育課程等を検討した。また、さまざまな指導法を工夫し、実践した。	来年度は中学1期生が高校生となるため、より効果的な授業形態や教育課程を検討していかなければならない。	中高一貫6年間の継続した学習を効果的に行える教育課程の編成に取り組んでいる。 SSHの二期目が始まり、新たな5年間の理数科教育課程の編成に取り組んでいる。 授業公開の参観率は倍増しているため先生方の研修も意欲的になっている。 高校でも観点別評価について、検討、研修等が必要である。 授業アンケートを計画的に実施し授業改善に生かしている。 習熟度別少人数学習を取り入れ、効果を上げている。	
		一貫教育校の特徴を生かし、6年間を見通した教育課程を作成する。	B					
	生徒の基礎学力の定着と思考力・応用力の向上を図る。	学習意欲を高め、目標をもって自主的に学習する態度を養う。毎日家庭学習する生徒80%以上を目指す。	B	B		日々の授業を工夫することや長期休業中の学力補充講座により、基礎学力の定着に努めた。毎日少しでも自宅学習する生徒は普段の生活では高校生74%、中学生94%であった。		生徒に興味・関心をもたせ、自主的に学習する態度を育成することができる授業の実践に努める。
		生徒の基礎学力を定着させるために、課題の点検や学力補充講座を実施する。	B					
	わかる授業を実践し、指導法の研究に努め、指導力の向上を図る。	生徒の発達段階に応じた指導法を確立するとともに、評価方法について、研修会をもち、理解を深める。	B	B		観点別評価に関する指導主事の研修会を実施し、学校全体で評価について検討を加えた。また、よりよい授業の実践と指導力向上のため、公開授業を充実させた。授業公開した教員、見学した教員は昨年度より倍増した。		観点別評価を実施するとともに、現れてくる諸問題を考えていく。また、公開授業をより充実させ、指導力を向上させる。
		授業公開を行い、自己の授業を振り返ることにより、研修を深め、指導力の向上に努める。	A					
進路指導	個々の生徒の個性の伸張に努め、意欲的に進路実現をめざせる環境づくりに努める。	スタディサポートや各種進学補習、校外模試を計画的に実施し、学力伸長の機会の充実を図る。	B	B	校外模試の受験において、デジタルサービスを活用し、事前・事後の指導の充実を図ることができた。 進路室のIT環境の整備が大学入試のWEB出願の急増に対応でき、生徒の利用も増加した。	WEB出願をはじめ、多くのITコンテンツに対応するため、進路閲覧室の機器の更新を計画的に実施する。	進路指導室の資料やIT環境を整え、進路選択に必要な情報を生徒等に提供している。 各種の模擬試験を利用した進路指導で、3年間を見通して進路指導を計画的・組織的に進めている。	
		進路資料等の整備・充実を図り、生徒への的確な情報提供に努め、進路実現に向けて高い意識をもてる環境づくりに努める。	A					
	理数科単科高校の特色を活かした進路指導に努める。また、中高6年間を見通したキャリア教育を推進する。	「探究科学」を活かした受験指導により、国公立大学及び難関私立大学の理系学部への合格者数を20人以上にする。	B	B	1・2年生は学会発表やコンテスト参加等には積極的であったが、基礎学力の定着が不十分な生徒が多数見られた。 中学でのキャリア教育では、職場体験 大学研究室訪問、大学出前授業受講等多くの取組みを実施した。	次年度2,3年生には「探究科学」の実績作りと基礎学力定着をバランスよく両立させる。		
		中高一貫教育校として、校種間や学年間で連携をとりながら、発達段階に応じた6年間のキャリア教育を推進する。	A					

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策	
生徒指導	現在取り組んでいる全校体制による生徒指導をより一層、強化・推進し、基本的生活習慣の定着と規範意識の積極的啓発を図る。その結果として、生徒自身が誇りを持てる学校づくりを目指す。	校門指導・昇降口指導・校内巡視などを毎日行い、生徒とのコミュニケーションを図る中で、生徒理解に繋げ、規範意識高揚を図る。	A	B	様々な場面で意識啓発や継続的な指導を続けた結果、一定の成果が見られたように思う。問題行動や特別指導も少なく、生徒たちは落ち着いた学校生活を送っている。	各種集会を効果的に利用して、規範意識を向上させるような働きかけを行う。	全ての教職員が日々の校門指導、昇降口指導、校内巡視等を行い、生徒とのコミュニケーションを取りながら生徒理解を図り、規範意識の向上に取り組んでいる。	
		時間厳守の精神を徹底し、遅刻や入室遅れの絶無を目指す。挨拶を励行し、元気できびきびした生活習慣の確立を図る。	B		しかし、価値観が多様化したためか、こちらの思いが伝わらない生徒や保護者の割合が増えてきたように思うし、その対応に時間を取られている現状がある。 引き続き、愛校心の喚起と帰属意識の発揚を促し、生徒の自主的自発的な行動を期待したい。	教師間の情報交換や保護者との連携を効果的に行う。特に初期対応に際しては、迅速かつ慎重を期す必要がある。		
	中1から高3までの学年の幅にわたる生徒が安心して登校し、生活できる学校を目指す。	人権教育部と連携し、生徒の悩みを積極的・共感的に受け止め、これに応える指導や助言を与える。	B		教員側がチャイムと同時に授業が始まる環境を整えているため、不注意による入室遅れはほぼ皆無と言えるが、朝の遅刻はなかなか減少しない。基本的生活習慣確立のため、家庭との連携をさらに密にしたい。	教員側の規範意識の高揚も図りたい。		生徒の実態をアンケートなどでよく捉え、教職員間で共通理解の下、連携協力して生徒指導に取り組んでいる。
		教員と生徒の人的ふれあいを密にし、生徒一人一人の個性・特徴を生かし、大切にしていって、内面に迫る指導を心掛ける。	A		家庭内の問題や交友関係に適応できず、日々の生活に支障を来している生徒に対して、効果的な指導や助言を行う難しさを感じている。本年度は家庭内の問題や交友関係の問題から進路変更に至ったケースもあった。いじめアンケートや生活アンケート等では深刻なケースは報告されていないものの、ほとんどの生徒がスマートフォンを使用しているため、LINEなどのアプリによるトラブルも数件報告があった。コミュニケーションや対人関係などについて考える機会を持たせたい。	学校や生徒を取り巻く環境が刻々と変化する現在、教員向けの生徒指導研修会を積極的に企画し、今にふさわしい生徒指導の構築を目指したい。		
			数年前から朝の校門指導を全校体制で行っている。全教員が交代で校門に立ち、生徒に声かけをした。生徒たちの表情と内面の変化を早期に捉えることができた。	朝夕の校門指導・昼休みの校内巡視・定期的な校外巡回指導などを生徒指導部だけでなく全校体制で取り組み、学校を挙げての生徒指導に取り組んでいきたい。	薬物の乱用防止やNET犯罪、制服の着こなし等の講演会をもつなど、計画的に規範意識の高揚を図っている。			

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
保健体育	体育活動をとおり、健康の意義を踏まえ、健康の維持増進、体力づくりを基盤に「生きる力」を育む。 授業をとおり、体育行事への積極参加と主体的な行動を促す。	教職員自らが健康の維持増進・体力づくりの必要性を共通理解し、授業の安全性を踏まえ積極的な工夫改善に努める。	A	A	学校行事（球技大会・体育大会）をとおり、生徒たちと積極的に関わることで、健康の大切さを体感し自覚できた。	生徒に自主性が育つ指導が求められる。 計画から実施に至る運営にもっと関わらせることで充実感・達成感を体験させることが必要であると考えられる。 能動的な行動への意識改革。（生徒との多くの時間を共有し、コミュニケーションをとる）	体育大会、球技大会については、中学生の種目及び競技方法についてはさらなる検討が必要である。 防災計画による避難訓練の実施、校内の救急体制などを明確にし、安全管理に努めている。
		運動・スポーツに主体的に取り組むことにより、体を動かすことの大切さや喜びを体感するとともに、自らの健康を維持できる実践力を育てる。とくに体育行事へは、100%の参加率を目指す。また、社会の一員としての役割を意識させ、地域の催しやボランティア活動への参加を促す。	A				
		中高一貫教育の特性を踏まえ、集団での「個」を自覚させ、協調と責任ある行動をとれるよう中学、高1の集団行動を徹底する。また、高校2・3年生が自ら行う選択授業の主体的かつ能動的な取組を促す。	A				
保健活動をとおり、何よりも「健康」であることの大切さを自覚し、自らを改善していく資質と能力を育む。	各種検診（健康診断）の受診率100%を目標に日程や時間帯の調整を図り、受診しやすい環境づくりに努める。	B	B	養護教諭指導のもと、スムーズに保健室運営、健康診断等の検診が行われた。感染症の流行状況を保健便りや掲示物により告知した。流行時には拡大予防のための対応をした。 人間関係や家庭の悩みをもつ生徒の対応に苦慮した。また、今後、カウンセリングの充実と、本人・保護者・担任との連携を十分に図り、心身のケアの充実に努めたい。	教員間の連携を大切にし、生徒の心身の健康状態を観察することが重要である。また、学校医・スクールカウンセラー等専門家との連携も必要である。	心電図検査を除き、健康診断後の受診率が低い。健康診断の意義を再確認し、早期発見、早期治療につながるような指導が必要である。 基本的な生活習慣の乱れから、身体的症状が現れていると思われるケースが少なくない。	
	生徒の健康保持・増進のため、生活実態調査や健康だより等により、随時健康管理を促すとともに各検診の完全受診を促す。また、食育を含むアドバイス・個別指導の充実を図る。	B					
	欠席者サーベイランスの活用とともに、各種感染症へ迅速に対応する。また、カウンセリングの推進・充実を図り、生徒の心のケアに努める。	B					
人権教育 特別支援教育	様々な人権問題についての認識を深め、より充実した実践に努める。	様々な人権問題についての研修を深め教職員が共通理解を持って人権教育に取り組む体制を構築するため、年1、2回の職員研修を実施し、校外の研修にも参加する。	B	B	職員研修は「いじめについて」1回、「支援教育」等2回を、本校の実情に応じて実施した。その他校外の研修も、人教部を中心に随時参加した。 高入教の公開HRを高校1,2年で実施した。人教部で作成した指導案を基に各クラスの趣向を凝らした展開が好評を得た。	多様な生徒を理解し、よりよい関わりや指導ができる研修を企画する。 中学、高校6年間で系統立った人権LHRを企画・立案し、人権教育の更なる充実を目指す。	新入生対象のアンケート調査、人権ホームルーム、講演会を行うなど計画的に人権教育に取り組んでいる。 人権だよりの発行などで、保護者への人権に関する啓発も行っている。
		生徒の実態に即した人権LHRを企画・立案し、その実践に努める。本年度高入教が公開HRの会場校として、充実を図る。	A				
	支援が必要な生徒を支える学校の体制づくりに努める。カウンセリングの充実を通して、的確な生徒理解と適切な支援に取り組む。	面談や小学校・中学校訪問等により、生徒一人一人の実態や課題の把握に努める。さらに、家庭訪問等日々の活動をとおり、課題を抱える生徒への早期の対応を進める。 スクールカウンセラー、担任、家庭などと連携して、支援を必要とする生徒等のケアに努める。	B				

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果			成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
環境整備	自主的な清掃活動を推進し、生徒の美化意識向上を図り、学校環境の美化を推進する。	日常の学校生活で、ゴミの持ち帰り等のゴミの減量化や分別の徹底、リサイクル運動に取り組み、環境美化の意識を高め、快適な学校環境の実現を図る。	B	B	B	日々の清掃は熱心にやっている。しかし、要領が悪く時間がかかる。特に行事前の大掃除ではやり残しもあった。	来年度からは学級数減により、清掃分担区域の統合を進め、大掃除の時間配当を教務部と連携して行う必要がある。	清掃活動にボランティア活動や体験的な活動をうまく取り入れている。
		今年度3回通学路清掃を行い生徒の美化意識の向上を図り、地域との関わりを深める。	A			各委員会に加えて、生徒会役員や運動部有志も清掃に参加した。		
文化図書	文化祭を通して、文化教育の充実と活性化を図り、クラスの団結力を一層強める。	文化委員がクラスを中心となり、まとめていく存在となるよう文化委員会の活性化を図る。また、できるだけ生徒の意見を企画・運営に反映させながら、生徒自らが作り上げていく文化祭を目指す。	A	A	A	特に舞台発表のクラスの一体感が感じられ、生徒の鑑賞態度も向上した。模擬店での飲食マナーも問題なく、生徒が作り上げる文化祭に近づいている。	来年度から生徒数減による生徒会費・育友会費の総額減となる。それに見合う予算を立てる。	文化祭では生徒に達成感をもたせる結果とすることができた。
	読書指導の充実を図る。	新入生への図書室オリエンテーションを実施する。年9回の「図書室だより」の発行等、図書委員会活動の活発化を図る。	A	A		「図書室だより」は図書委員の推薦図書を掲載し、生徒による運営ができた。	図書室文化講座のテーマを各教科と連携したうえで設定するようにする。	さらなる読書活動の充実が望まれる。
		学級文庫を配置、また、生徒の要望に添った図書を購入することで生徒の読書意欲を高める。図書室に「テーマによる展示コーナー」を設け、生徒の関心を高める工夫を行う。	A			図書室利用のマナーが良く、生徒からの寄贈図書も増えた。文化講座のテーマは生徒の興味を引くものを選び、参加者は熱心であった。		
広報活動	適切な広報活動を展開する。	小学校・中学校及び塾などを訪問し、全職員の協力のもと、県内の小学生・中学生・保護者等に本校の特色や活動内容をよりよく知ってもらおう取り組みを重ねる。	B	B	B	本校職員が県内の学習塾を訪問し、説明会への生徒や保護者の参加を促した。特に奈良市内では青翔の知名度が低く、宣伝や勧誘の必要性を感じた。	訪問すべき塾を精選し、県全体に本校職員全員で広報活動をすすめる体制を作り上げる必要がある。	ホームページに学校の教育活動が多く掲載され充実してきているが、さらに、保護者や地域住民の一層の理解を得る工夫を期待したい。
		学校新聞「青翔Spirit」や育友会会報「翔揚」を発行し、保護者・生徒・地域との交流を深める。また、パンフレット等を作成し、広報活動を活性化させる。	A			「青翔Spirit」を年3回、育友会会報「翔揚」を年2回発行し、生徒・保護者・地域との交流を深めた。		
渉外	育友会活動の充実と活性化を図る。	年に2回の広報誌「翔揚」を発行して広報活動の充実と研修会等の活性化を図り、保護者との連携を密にしながら育友会行事への積極的な参加を促進する。これによって、保護者と教職員の協力体制による教育活動を実践する。	A	A	B	行事毎に役員のまとまりができ、運営が円滑に進んだ。特に、体育大会や文化祭への参加により、生徒や教職員との交流が深まった。	クラス数減による規約の改定、引き継ぎ方法の改善等を検討する必要がある。	活動に支障がないように改善等を期待したい。
	同窓会（まほら会）活動の充実と活性化	まほら会評議員とクラス幹事との連携を強め、卒業生の同窓会行事への積極的な参加を促し、同窓会活動の充実を図る。	B	B		総会では、御所高校と青翔高校卒業生が、世代を超えて情報交換をした。SSH事業や中学生の活動を報告し、意見をいただいた。	今年度より卒業生数が半減する。それに伴う収入減で活動の見直しが必要。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
理数 SSH部	自ら探究する力と 伝え合う力を高める 「青翔スパイラルア ップ・プログラム」、 科学英語の実践的な 活用能力を高める「青 翔グローバル・コミ ュニケーション・プ ログラム」、体験を通 して視野を広げる「青 翔エクスペリエンス ・ラーニング・プロ グラム」を体系的に 結びつけることで、 科学技術系グローバ ル人材を育成する。	「青翔スパイラルアップ・プログラム」に基づき、本校SSHの根幹となるPDCAサイクルを重視した科目「スーパー探究科学」（中学校では「数学探究」「理科探究」）の更なる研究及び実践を行い、各種学会ジュニアセッションでの発表生徒を昨年度より増やす。	B	A	本年度からSSHの主対象生徒が学年全体に広がったことにより、学会参加生徒数は昨年度より増加したが、延べ数としては減少した。コンピュータ等の備品に、SSH予算を多く投入する必要があることが影響していると考えられる。	より多くの生徒たちや探究担当教員に学会参加への啓発を行うとともに、参加費用についての手立てを行う。	SSHに関する体験的な取り組みによって生徒の学習意欲は高まっている。今後、これらの取組が学力に結びつくよう授業の展開・評価等の工夫を期待する。 教職員の体験・研究に対する熱心な指導のおかげで生徒はたくさんの経験を積んでいる。こうした様々な体験学習や各種発表会への参加等で、生徒たちには確かな自信が付いてきている。
		「青翔グローバル・コミュニケーション・プログラム」に基づき、新SSH科目「スーパーサイエンス英語」に関する研究及び実践を行うとともに、海外姉妹校との交流や共同研究を推進する。海外研修をとおして、英語検定の受検者を昨年度よりも増加させる。	A		新SSH科目「スーパーサイエンス英語」については、アクティブ・ラーニングを積極的に取り入れた授業展開がなされている。海外研修と関連して英語検定の受検を呼びかけた結果、受検者数が昨年より70%増加した。	英語の授業や「スーパー探究科学」の成果がより生かせる形の海外研修を計画していく必要がある。	
		「青翔エクスペリエンス・ラーニング・プログラム」に基づき、SSH科目「スーパーアナライズ数学」、生徒の興味・関心に応じて自由に選択できる課外活動「青翔アラカルト・ワークショップ（SAW）」に関する研究と実践を行う。	A		SSH科目「スーパーアナライズ数学」については、第1学年の全生徒を対象に履修させたことにより、データ処理の方法等が徹底できた。課外活動「青翔アラカルト・ワークショップ」については、多くの教員の協力を得ることができた。	来年度以降も、「青翔アラカルトワークショップ」において、魅力的な講座を開講していきたい。	
	SSH第1期からの成果を県内外の中学校・高等学校に普及し、全国でも数少ない理数科単科高校としての特色を明確にする。	本校の探究活動の取組を、2月に行う「スーパー探究科学研究発表会」、今年度から8月に行う「探究フォーラム」で発表し、大学教授や他校教員、保護者からの評価を上げるとともに、来場者数を昨年度の2倍に増やす。	A	B	「スーパーサイエンス『探究科学』研究発表会」では、SSH第2期目ということ、また南極授業を取り入れたこともあり、多くの保護者・他のSSH校教員等が来場した。	「サイエンスギャラリー」（「探究フォーラム」より変更）については、より多くのSSH校に呼びかける必要がある。	
		「スーパー探究科学テキスト＜基礎・基本編＞」及び「ノーベルノート」の全面改訂を行い、全国の理数科高校・SSH校等に配布し、本校の探究活動の普及を図る。	B		「スーパー探究科学テキスト＜基礎・基本編＞」では、探究活動の評価において、ルーブリック等の導入を検討しているため、改訂が予定より遅れている。	より良い冊子を作成して、来年度中に他のSSH校等に配付する。	

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題（評価結果の分析）	改善方策等	学校関係者評価（結果・分析） 及び改善方策
中学 第1学年	基本的な生活習慣を確立し、安心して学校生活をおくることができる集団をつくる。	全員がしっかりと挨拶ができ、敬語を使えるようになる。 「早寝・早起き・朝ごはん」をモットーとし、朝ごはんを100%摂って登校できるように指導する。 欠席、遅刻をしないように指導し、遅刻は全員で年間30回以下にする。	B	B	挨拶はしっかりと出来るようになった。朝食を毎日食べている生徒は93%であった。遅刻は2月末時点で58回であり、目標を達成できていない。特定の生徒の遅刻が多く、不注意による遅刻の数は3割程度である。	規則正しい生活習慣を確立するために、家庭とも協力して指導を継続する必要がある。 集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い集団を作っていくことができるように引き続き指導する必要がある。コミュニケーション能力を高める方策を考えたい。	1学年1クラスでもあるので、先生の指導の下、クラス生徒との関わりの中で、集団生活のルールやマナーについて学び、家庭ともよく連携して、よき集団づくりに取り組んでいる。
		クラスの役員、係の自覚をもち、全体のために努力する態度を養う。 学校に対して9割以上の生徒・保護者が満足するような学校生活を保障する。 クラスや先輩たちとの関わりの中で集団生活のルールやマナーを学ぶ。	B		だんだんと全体のために努力する意識が芽生えてきた。学校に対する満足度も高く、9割以上の生徒・保護者が満足と答えている。 いろいろな経験をしながら、集団生活のルールやマナーを学んでいる。		
	将来について考え、目標をもって、計画的に学習に取り組む態度を養う。	授業を中心に据えて学習する習慣をつけさせる。 予習復習を大切にするように指導する。 課題やレポート等の提出を徹底させる。 大学への進学を前提とし、将来の進路や自身の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。 家庭学習に毎日取り組む生徒の割合を8割以上に定着させる。 計画的に家庭学習に取り組む態度を養う。	C	B	学習状況調査から、授業中はノートをとるのに精一杯で、自ら学習する態度が養えていないことがわかる。課題等の提出を忘れる生徒が固定化されてきた。 90%が毎日学習に取り組めるようになった。平日に家庭学習を2時間以上している生徒の割合が3%と極端に少ない。計画的に家庭学習に取り組ませたい。	家庭学習を習慣化させることが最重要課題である。目的を持って、自ら学習に取り組むように家庭の協力を得ながら、継続的に指導していきたい。宿題や課題をきっちりこなすように指導を続けたい。	
中学 第2学年	基本的な生活習慣を確立し、集団の中で目的をもって活動できるようになる。	全員がしっかりと挨拶ができ、敬語などの言葉遣いが正しくできるようになる。 「早寝・早起き・朝ごはん」をモットーとし、朝ごはんを100%摂って登校できるように指導する。 欠席、遅刻をしないように指導し、遅刻は全員で年間30回以下にする。	B	B	挨拶はできるようになってきたが、言葉遣いはまだよくなっていない。朝食を毎日とっている生徒は89%である。遅刻は2月末時点で93回であり、目標を達成できなかった。特定の生徒の遅刻が半数を占めている。	規則正しい生活習慣を確立するために、家庭とも協力して指導を継続する必要がある。 集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い集団を作っていくことができるように引き続き指導する必要がある。安心・安全で楽しい学校生活を送ることの出来る集団になるよう継続指導していく。	家庭と連携しながら、継続してよい集団づくりに取り組んでいる。2年になって集団行動のルールやマナーも身に付け落ち着いたクラス集団となっている。
		クラスの役員、係の自覚をもち、全体のために努力する態度を養う。 掃除に真面目に取り組む態度を養う。自ら考え工夫しながら、教室や学校全体の美化に取り組む。 高校生や下級生との関わりの中で集団生活のルールやマナーを学ぶ。	B		2年生になって、ずいぶん落ち着いてきた。様々な行事のなかで、集団行動のルールやマナーを習得している。一方、まだまだ公共心や他者に対する寛容を身につけなければならない生徒もいる。掃除は真面目に取り組んでいる。		
	将来について具体的に考えていく態度を養う。進路実現のため目標をもって、計画的に学習に取り組む態度を養う。	授業を中心に据えて学習する習慣をつけさせる。予習復習を大切にするように指導する。 課題やレポート等の提出を徹底させる。 学力推移調査では各教科とも全国偏差50以上を目指し、下位層(GTZのB以下)の割合を半減させる。 大学への進学を前提とし、将来の進路や自身の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。	B	B	全国学力推移調査では、各教科とも全国偏差値50以上をマーク・記述回ともに達成できた。GTZのCレベルは5人、Bレベル以下は20人から23人に微増した。予習復習に取り組む割合は減ってきている。 課題等の提出を忘れる生徒が、固定化されてきた。予習復習は25%の生徒ができていない。平日に2時間以上家庭学習	家庭学習を習慣化させることが課題である。中だるみにならないように、目的をもって学習に取り組めるようにしたい。家庭の協力を得ながら、継続して指導していきたい。成績上位者の成績も更に伸びるように指	

		家庭学習を平日2時間以上取り組む生徒の割合を8割以上に定着させる。計画的に家庭学習に取り組む態度を養う。				に取り組んでいる生徒は、昨年は33%であったのが本年度は12%しかいない。	導していきたい。	
中 学 第3学年	基本的な生活習慣を確立し、集団の中で目的をもって活動できるようになる。	全員がしっかり挨拶ができ、敬語などの言葉遣いが正しくできるようになる。 「早寝・早起き・朝ごはん」をモットーとし、朝ごはんを100%摂って登校できるように指導する。 欠席、遅刻をしないように指導し、遅刻は全員で年間30回以下にする。	B	B	B	敬語・挨拶だけでなく、場面に応じた対応ができるようになってきた。朝食を摂っていない生徒は、まだ10%いる。遅刻は12月末で30回であり、目標達成は難しい。通院などの遅刻が多く、不注意による遅刻の数は半分程度である。	基本的な生活習慣を確立することを最優先課題とする。家庭とも協力して指導を継続する必要がある。 集団の中で自分の役割を責任を持って果たし、より良い高校生となれるように引き続き指導する必要がある。安心・安全で楽しい学校生活を送ることの出来る集団になるよう継続指導していく。	心と体を鍛え、良き青翔高校生となるよう指導を継続していくことが必要である。
		クラスの役員、係の自覚をもち、全体のために努力する態度を養う。 掃除に真面目に取り組む態度を養う。自ら考え工夫しながら、教室や学校全体の美化に取り組む。 高校生や下級生との関わりの中で集団生活のルールやマナーを学ぶ。	B			3年生になって、ずいぶん落ち着いてきた。様々な行事のなかで、集団行動のルールやマナーを習得している。掃除には真面目に取り組んでいる。一方、登下校の態度やマナーはまだまだ悪く、周囲に迷惑をかける場面が多々あった。公共心や他者に対する寛容を身につけなければならない生徒もいる。	6年制の学校の多くが抱える「中だるみ」という最大の問題を抱えている。大学進学を見すえた学習ができるように指導していきたい。成績上位者の成績も更に伸びるように指導していきたい。授業を中心に据えて大学入試に対応できる実力をつけていきたい。	生徒や保護者の進路希望実現のために、更に取り組みを続ける必要がある。
	将来について具体的に考えていく態度を養う。進路実現のため目標をもって、計画的に学習に取り組む態度を養う。	授業を中心に据えて学習する習慣をつけさせる。予習復習を大切にするように指導する。課題やレポート等の提出を徹底させる。 学力推移調査では各教科とも全国偏差50以上を目指す。 大学への進学を前提とし、将来の進路や自身の適性について考え、目的をもって学習に取り組めるようにする。全国模試の成績上昇を60%以上の生徒に体験させる。 家庭学習を平日2時間以上取り組む生徒の割合を8割以上に定着させる。計画的に家庭学習に取り組む態度を養う。 各種コンテスト・検定への参加・入賞を70%以上の生徒に体験させる。	B	B	B	睡眠時間が確保できていなくて、授業中に眠い生徒の割合が高い。半数近くの生徒が予習・復習ができていないと答えている。各教科とも、マーク・記述回とも全国偏差50以上をクリアしている。 大学進学に対してもだんだん考え出しているが、目的をもって学習に取り組めるようになったわけではない。全国模試の成績上昇者は23人で、多くの生徒が達成感を感じている。平日に2時間以上家庭学習に取り組んでいる生徒は、昨年は30%であったのが本年度は10%しかいない。各種コンテスト・検定へは多くの生徒が参加し、検定への合格者やコンテストの入賞者は増えた。		

評価項目	具体的目標 (評価小項目)	具体的方策・評価指標	自己評価結果		成果と課題 (評価結果の分析)	改善方策等	学校関係者評価 (結果・分析) 及び改善方策	
高 校 第1学年	高校生としての規範意識と、青翔高校への帰属意識をもたせ、規律ある行動のとれる生徒を育成する。	挨拶の励行と時間厳守の習慣を身につけさせる。また、学校や社会のルールを守る規範意識を養い、実践できる力をつける。各クラスの出席率95%以上を指標とする。	B	B	挨拶や時間厳守の習慣は、全生徒が身に付けた。また、全体の出席率は97%で指標を上回ったが、特定の生徒の欠席・遅刻は、2学期以降増加した。	学校や社会のルールを守ることの大切さを理解するために、生徒自身が積極的に活動できる場を、学校にも校外に設けて指導にあたる。	基本的な生活習慣の確立と規律ある社会性の育成に継続的に取り組んでいる。	
		学級活動、部活動や学校行事への積極的な参加を促し、集団行動を通じて仲間づくりの大切さを認識させ、社会性やコミュニケーション力を養う。部活動継続率90%以上を指標とする。	B		文化祭や体育大会など行事を通して、仲間づくりができた。しかし、部活動継続率は、75.3%で目標を下回った。			
	自己を見据えた進路目標の実現に向け、様々な学習活動に積極的に取り組む姿勢を育成する。	授業や家庭学習の大切さを理解させ、継続的な課題に取り組み基礎学力の定着を計る。また、成績向上に向けた積極的な姿勢も養う。模擬試験における成績向上率70%以上を指標とする。	B		放課後の受験対策講座や朝学習などを通して基礎学力および応用力を育成した。その成果は生徒の意欲により異なった。模擬試験による成績向上生徒率は、67.3%で、目標をやや下回った。	具体的な進路目標の設定のための支援を強化し、目標達成に向けての計画的な取り組みをさせる。検定試験や各種学会やコンテストへの参加と入賞などの実績を蓄積させ、進路目標実現を目指す。		基礎学力の定着と積極的な学習習慣の確立に向けて取り組んでいる。
		授業やホームルーム活動、SAW、進路講演会などを通じて、生徒全員にあこがれの(=高い)目標を設定させ、その進路実現の原動力とし、高校1年より積極的に取り組ませる。	B		人権HR・進路HRや進路講演会などには、積極的に取り組ませることができた。しかし、まだ具体的な進路目標を設定できない生徒も多くいる。			
高 校 第2学年	自己の行いを客観的に捉えることができるとともに、周囲との関係を理解し規律ある行動のとれる生徒を育成する。	挨拶の励行と積極的なコミュニケーションの習慣を育む。学校や社会のルールを守ることの大切さについて理解させ、実践できる力を養成する。全生徒に挨拶の習慣を身につけさせ、面談などを通して相手の目を見て話せる生徒率80%以上をめざす。	A	B	挨拶の習慣は、全生徒が身につけた。相手の目を見て話せる生徒の割合は80%になった。	来年度は高校生活最終学年にあたるので、最上級生としての自覚を促し学校生活に積極的に取り組ませる。進路の第一希望の実現に向けて面接指導を充実させ、さらなるコミュニケーション力の育成をはかる。	学級集団における仲間づくりなどに意識的に取り組み、クラス活動や学校行事に意欲的に取り組んでいた。	
		クラスでの活動および部活動や学校行事への積極的な参加を促し、社会性を養成する。部活動継続率90%以上を指標とする。	B		部活動継続率は、88.2%で、ほぼ目標値であった。			
	進路目標の実現に向けて、様々な学習活動に積極的に取り組むことができる生徒を育成する。	授業や家庭学習の大切さを理解させ積極的に取り組む姿勢を育成し、基礎学力の定着と大学入試合格のための応用力を養成する。模擬試験における成績向上生徒率70%以上を指標とする。	C		放課後の受験対策講座や朝学習などを通して基礎学力および応用力を育成したが、模擬試験による成績向上生徒の割合は、40%で、目標を下回った。	実態に即した指導内容を再度研究し、進路の第一希望の実現に向けて授業や講座が効果的に実施できるように取組を深める。来年度についても、各種コンテストや学会へ積極的に参加するように指導する。		自己の将来を具体的に考えさせ、自己実現に向けた意欲の喚起する指導の継続が望まれる。
		授業やホームルーム活動、面談を通じて、進路の目標を設定させる。さらに、第一志望大学の合格に向けて、学習計画を立て粘り強く取り組める力を養成する。学会や各種コンテスト、検定等への参加と入賞などの実績を70%以上の生徒に蓄積させる。	A		学会や各種コンテスト、検定等への参加と入賞などの実績は71.4%以上の生徒が、実績をあげることができた。			

高 校 第3学年	最高学年としての自覚を持たせ、集団における役割と責任感を育て、社会を形成する優れた一員となるよう育成を図る。	最高学年としてリーダーシップを発揮し、学校行事や学習への取組をとおして下級生の範となるよう自覚を促す。また、校外学習等の集団活動をとおして、学校や社会のルール・マナーについて考える機会を設け、一社会人として求められる規範意識の高揚を図る。	A	A	B	入学時より基本的な生活習慣が身に付いている生徒が大半であった。一部の生徒は改善できずであった。今年度は最高学年の生徒として、ある程度は規範となれたと思われる。ただし、自分自身のことではあるものの、周囲の状況を見ながらの集団行動におけるリーダーシップの発揮に関しては不足していた。	集団での指導と個人の指導をうまく連動させながら指導していく必要がある。	生徒の自己実現に向けての声かけや面接指導がしっかりなされていた。	
		毎朝の校門・HR・廊下等での声かけを通して、挨拶の励行や時間厳守等の基本的な生活習慣、遅刻・早退の率を1%以内にする。	A						
	個々の生徒の個性及び進路希望を尊重し、自己実現が可能な進路の選択を援助する。国公立大学、近畿・大阪工業大学合格30名をめざす。	授業や集会等、多くの機会を利用して、生徒たちの進路実現に対する自覚を喚起する。また、面談等を充実させ、目標を高く設定し生徒の実態に合った指導する。	B	B		進路を真剣に考え、授業に対しても受験を意識した学力を身に付けるための姿勢がみられた。 クラスの特性を生かした進路指導の展開を、担任を中心に全教員で関わっていく必要がある。	「探究科学」を利用した国公立大学・私立大学へのAO入試・推薦入試のシステムについて、教員・生徒が共通理解しながら、進路実現を目指したい。		進路対策講座などの講習の他、進路実現のための面談指導が計画的組織的になされている。
		進学者全員のステップアップ講座や模擬試験等の積極的参加を促していくとともに進路実現を果たせる学力を向上させる。進路実現に向けた情報収集を積極的に行う。	B						

平成 2 8 年 度

学 校 評 価 計 画 表

(基準日: 6月1日)

奈良県立青翔中 学 校
奈良県立青翔高等学校